

## ダイジョブ ダイジョブ

勝又悦子

奨励者紹介〔かつまた・えつこ〕

同志社大学神学部教授

〔研究テーマ〕ラビ文献研究、ユダヤ教の歴史と思想

「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして灯の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

(マタイによる福音書 5章 13—16 節)

### 「地の塩」プロジェクト

今読んでいただいた箇所は、聖書の中でもよく知られた箇所です。

世の中の小さな存在であっても、塩つぶのようになくしてはならない働きをする人となれ、山上の町の灯りのように、人々に、社会に光をもたらす人間になれ、ということではないかと思えます。そして、この有名なフレーズを冠して、2019年度より神学部では、「地の塩」プロジェクトを進めております。これは、2019年度 ALL DOSHISHA 教育推進プログラムとしても採択されています。本来同志社は、地の塩、世の光たる人間、小さな存在であっても世の中に身を挺して貢献する、さまざまな人々に寄り添う、そういう人間を作り出すことにあったと私も学んでおります。この「地の塩」プロジェクトは、その建学の精神に立ち返るために大学の授業の抜本的な変革を目指したものです。滋賀県東近江市にある止揚学園を始めとした、神学部と関連の深い社会福祉施設やグループでのフィールド・ワークを主体とした授業を展開しております。ぜひ、皆さんにも関心をもっていただけたら幸いです。

では、ユダヤ教研究を主体としてきた私が、いわば専門を超えて、なぜ、このプロジェクトのお手伝いをするようになったかということ、23歳になった私の長男が重い障害をおっており、常に福祉のお世話になっているということが関係しています。

そして、今日は大変私的な話になるのですが、この長男とここまで歩んできた過程で、感じてきたことを伝えさせていただきます。

### 「純」のこと

長男の名前は、純粹の「純」といいます。我々夫婦はともにユダヤ教関係の研究をしているので、イスラエルのエルサレム・ヘブライ大学に、足掛け10年ほど留学しました。留学中の1998年に生まれたのが長男、純です。おなかにいる時も、生まれた時も、何の問題もないと言われたのですが、生まれてちょうど

1カ月が過ぎようとした夜中のこと、突然すごい形相で、痙攣発作重積状態になりました。救急搬送され、集中治療室に入り、一命はとりとめました。新生児期の重い発作、あるいはもともと何か原因があったのか、もはや分からないのですが、脳に大きなダメージをもたらし、以後、運動機能的にも、さらに知的にも重い障害をもっています。

てんかんがあり、運動機能も非常に遅れておりますが、それでも、10歳の時に歩き始め、歩くことも動くことも大好きで、家の中でもそれぞれ歩き回っているのですが、非常に危なっかしい歩き方です。さらに、知的障がいが高く、言葉を発することはなく、また、視線が合いづらいのでコミュニケーションがとれません。着替え、食事、排泄、すべてにおいて介助が必要な状況です。身体障害者手帳1級、療育手帳A判定になります。

イスラエルでは、2歳の段階から毎日療育センターに通い、多くの方々にお世話になりました。純が4歳をすぎた時に、縁あって夫の仕事の都合で関西に転居することになったわけですが、以降、療育支援センター、特別支援学校、多くの方々に、それはそれは温かく支援していただき、今は毎日元気に、生活介護施設へ通っています。今朝も、キャーキャー言いながら、介護施設に向かいました。

そういう経緯もありまして、「地の塩」プロジェクトの話が立ち上がった時にお手伝いにかかわらせていただくようになりました。

### 純の言葉

さて、純は外出が大好きなので、家にいる時は、よく玄関先に正座で座り込んで、玄関が開くのを待っています。さらに、ペットボトルや買い物のビニール袋などで、かしゃかしゃ音をたてるのが好きです。座り込んでかしゃしゃならしながら、ぶつぶつ、いわゆる赤ちゃん期の言葉である喃語、「ごによごによ、ぐじゅぐじゅ…」と、ずっと何か声を発したり、ときどき「はーっ」など、気合の入った声を出したりして、とにかく、「ごによごによ」言いながら過ごしてくれるわけです。

そんなふうには、純が「ごによごによ」と声を出しながら一人遊びしている中、私は、ご飯の支度をし、ばたばたと家のことをするわけですが、ここ1、2年のことなのですが、家事をしている時に、急に、誰かに話しかけられたような気がして、「何っ?」と、私が振り返ることが増えてきたのです。そうすると、下の子たちが一純を筆頭に、弟妹が4人います—「今の純やで」と言うのです。

最初にそういうことがあった時は、みんなで、「ええっ!?!」と顔を見合わせて、かなり驚きました。ちょっと、「お化けと話した!?!」ような空気が流れました。でも純は、そんなことお構いなく、「ぶじゅぶじゅぶじゅ…」と一人遊びしているんですね。一人遊びなのですが、なんとなく弟妹がいるところの傍らにいたのが落ち着くみたいです。

その後も、誰かに話しかけられた気がして、「何?」と答えると、やはり純が、「ぶじゅぶじゅ、ごによごによ」言っている声だったということが起こりました。こういうことが、ここ1、2年、急に増えてきているのです。純の「ぐじゅぐじゅ」とか、時々「ひゃあーっ」などと言っている声の中の一節が、下の子からの呼びかけのように聞こえるのだと思われます。そして、不思議なことに、やっぱり兄弟、家族の呼びかける声に、すごく似ているのです。

これまでも一人遊びで、「ぶじゅぶじゅ…」と声を出してきたわけですが、それまでは、純の一人遊びと

して、話しかけられた感じが全くしないのに、誰かに呼びかけられたと私が瞬間的に感じるの、純の声の出し方が一体、どこが、どのように、それまでと違っているのだろうか、ということなのです。おそらく、タイミングや、発声などそういうことだと思うのですが、その答えは出ていません。

さらに、ここ何カ月かのことなのですが、どうも「ぶじゅぶじゅ」一人遊びしている時に、時々本当に言葉に聞こえることがあるのです。

最初にはっきりと言葉として聞こえたのは、ご飯を食べさせている時に、急に発せられた、「ばあ〜」でした。それで、私が、「あれ、純、今なんか喋ったんちゃう」と言うと、末っ子が、一言「ばばあ」と。今のは「ばばあ」と言ったんだというわけです。「純の言葉をずっと待っていて、それが『ばばあ』やったら、お母さんは泣くで」と笑ったのですが、「ばばあ」だったかもしれません。「ばばあ」が初めて聞き取れた言葉であったかもしれませんが、その次に、時々耳に飛び込んでくる言葉のような響きが、今日のタイトルにつながるのですが、「ダイジョブ、ダイジョブ」なのです。

「ぐじゅぐじゅ、ぶじゅぶじゅ・・・」、時々「はああ」と気合を入れる声が発せられる間に、結構はっきりと、「ダイジョブ、ダイジョブ」と聞こえることが、何度か続いたのです。初めて、それが、「ダイジョブ」という言葉として耳に飛び込んできた時には、思わず、「ダイジョブ？」と聞き返してしまいました。

その後も、時折「ぐじゅぐじゅ」の合間に、「ダイジョブ・・・っ」と聞こえることがあるんですね。

### 「言葉」とは何か

そういうことが続いて、私が思うのは、言葉って一体、何なのだろう、ということです。純としては、いつもと同じように純の言葉で「ぶじゅぶじゅ、ぐじゅぐじゅ・・・」と言ってきたと思います。しかしそれが、たまたま、我々が知っている発声法やアクセントやイントネーション、単語の型に偶然はまった時に、話しかけられたと感じたり、それが言葉として、我々に意味のある言葉の塊として聞き取れるのではないのでしょうか。だとしたら、私たちの言葉として認識できる音、響きの音域というか、認識の幅とは非常に狭いものなのではないかということです。私たちは「言葉」というもので、コミュニケーションの手段の大部分を握っているつもりになっているけれど、「言葉」というのは、こちらの認知範囲にはまらないと伝わらない、非常に幅の狭いものなのではないかということを感じるのです。つまり、私たちは言葉が理解できること、話せること、言葉を使って意思の疎通ができることが当たり前、それで、すべてが分かっているような気になっているかもしれないけれど、それは、ごくごく狭い、自分のアンテナにはまった時にだけ理解できるものであって、その周りには、私たちには感知できない世界が広がっているのではないかということなのです。

2016年7月、社会を震撼させる凄惨な事件が起こりました。相模原障害者施設殺傷事件です。19人の障がいをもった方が犠牲になりました。植松死刑囚は、言葉が話せない人は生きる価値がないと判断したと伝えられています。

しかし、私は言いたいのです。私たちが言葉だと思っているもの、聞いていると思うもの、見ていると思うもの、そちらの方が、よっぽど狭い世界なのだということです。自分が見えているもの、聞こえているものがすべてだと思ったら大間違いだ、ということです。

### 「ダイジョブ」の響き

そして、純から聞き取れた言葉が、よりによって、「ダイジョブ」という言葉であることが、また感慨深いところなのです。こう言うのはなんですが、家中で一番、大丈夫ではなさそうな「あんたが言うか」というところです。その後も「ダイジョブ」と聞き取れる時には、そのたびに「あんたが言うか」と私は突っ込みをいれてしまうわけですが、突っ込みをいれながらも、純の調子はずれな「ダイジョブ～」が耳に入ってくると、ちょっと拍子抜けするというか、ほっこりするとか、思わず苦笑してしまうのも事実です。

私自身いろいろ辛いことがあって、いっぱいいっぱいの中に、玄関から「ダイジョブ～」と聞こえてくると、思わず「大丈夫じゃないよ」と返しもするのですが、でも「ダイジョブ～」と言われたら、何か頬がゆるんでしまうわけです。笑いが起こるわけです。そしてその一瞬は、ダイジョブかもしれないと前向きな気持ちになるわけです。そういうことが何度もあって、「ダイジョブ」という言葉は、何気なく使っていますが、本当に温かい言葉だなあとあらためて気づかされました。「大丈夫？」と相手をいたわる言葉でもあるし、「大丈夫っ！」と相手を励ます言葉でもあり、背中を押す言葉でもあり、「大丈夫」って、いろいろなニュアンスがありますよね。「大丈夫っ！」と言われると、根拠はなくても大丈夫かもしれないと思わせてくれる言葉だと思うのです。純の「ダイジョブ、ダイジョブ」によって、「大丈夫」という言葉の温かさを教えられたわけでもあります。

そして、考えました。確かに、純の23年の人生の中で、この子は、本当にたくさんの「大丈夫」を受けてきたと思うのです。痙攣をおこした時、あちこち歩き回ってはつまづいた時、ふらふらした時、むせた時、熱がでた時、リハビリで訓練を受けている時。…いろいろな場面で、これまでかかわってきてくださった、療育センターや支援学校の先生方、通っているデイサービスのスタッフさんなど、たくさんの方々に「大丈夫？」「大丈夫っ！」と声をかけてきてもらったのではないかと思います。イスラエルにいる時は、「大丈夫」ではなかったですが、そういういたわる気持ちというのは、たくさんの人たちからいただいていたと思います。健常の子とちがって、大丈夫ではないことがたくさんあったから、周りのみんなに、「大丈夫」と声をかけてもらってきたのです。

そのたくさんの人たちからの「大丈夫」という言葉とその思いが、純の中に蓄積して蓄積して、沈殿して、それが今、「ダイジョブ、ダイジョブ」という音として、言葉として、この子から浸み出しているのではないのでしょうか。この子の成長を祈り、見守ってきてくださったすべての方々の「大丈夫？」と心配する声、「大丈夫っ！」と励ます声、思いが、この子を通して、また周りを、少なくとも私を、明るくする言葉として、発せられているのではないかと思ったのです。

この子自体は、やはり非常に非力な存在です。一人では何もできません。しかし、この子に向けられたたくさんの「大丈夫」が、この子を通して、時々ではありますが「ダイジョブ」という響きになって、まさに地の塩のごとく析出し、光のごとく浸み出しているのではないかと思われてなりません。

### 「地の塩」「世の光」が生れるところ

さて、今日読んでいただいた聖書の箇所にも、「地の塩」「世の光」という表現があります。これは、山上の垂訓、ガリラヤ湖畔を臨む丘で語られた言葉とされます。ガリラヤ地域は、確かに緑の茂る地域です。しかし、イスラエルに10年住んだ者からすると、ガリラヤ地域も一歩中心を離れると、砂漠や荒れ野です。

エルサレムとガリラヤ湖の間は砂漠です。そして、私が通ったヘブライ大学のすぐ裏手はまさに荒野が展開しております。砂漠は、死との隣り合わせの世界です。90年代であっても、砂漠地帯をバスで移動する時には、水も持たずにここに取り残されたら命を落とすだろうなという恐怖をひしひしと感じていました。ユダヤ教もキリスト教も、その始まりは厳しい自然の中にあったことを感じます。だからこそ、福音書で語られるガリラヤの緑の自然の大切さが際立つわけです。

そして、「地の塩」とはどこから出るか。地面から塩が析出するような場所です。それは、ガリラヤ湖畔の緑豊かな地域ではありません。地面から塩が析出する場所、それは、熱い熱い、日中は射るような日差しにさらされ続けている、過酷な荒れ野にほかなりません。

地面から塩が析出する場所として、すぐに思い出されるのが、死海です。観光の写真で、人々が湖面に浮かんで本を読んでいる、という画像がありますね。そこです。海拔マイナス430メートル、世界で一番低いところにある湖、灼熱の荒れ野。あまりの太陽光線の強さに水分が干上がってしまったわけです。塩分濃度の高さゆえに、人も浮いてしまうのですが、うまく入らないと、もはや薬品のような塩水の中に頭をつっこんでしまうことになり、かなり危険です。さらに、ちょっとでも切り傷があると、それはそれは、しみます。Dead Sea とか死の海と言いますが、ヘブライ語では「ヤム・ハ・メラツハ」、「ヤム」が海、塩が「メラツハ」で、「塩の海」です。

死海に行くと、いくつか観光スポットがありまして、浮かんだり、泥パックをしたりするスパがあります。そして、水辺では、いたるところで塩が析出しているんですね。だから、ビーチサンダルを履かないと危ないのですが、塩の析出がどんどん進んでいるのが目で見て分かる光景が広がっています。

つまり、灼熱の太陽光線の中、世界のある意味どん底の、その灼熱の荒れ野において、初めて地から塩が、「地の塩」として析出しているということになります。

そして、「世の光」。光を感じるのはいつか。明るい昼間に、光は意識されません。砂漠の中で、灼熱の太陽が照り付ける昼間には、あえて、光は意識されません。十分明るいですが。しかし砂漠は、昼と夜の差、そして寒暖の差がはっきりしています。夜は、それはそれは、漆黒の闇が広がります。光を感じるのは、闇の中においてこそ、です。

福音書の言葉では、「山の上にある町」「家の中での燭台」が挙げられているので、人々が居住する地域と考えられますが、それでも、「山の上の町が隠れることができない」というのは、ガリラヤ地域とはいえ、木々が山を覆いつくすことのない、緑の少ない風土を反映していると思われます。町の中心を離れれば、やはり荒野が広がっています。そしてとつぷりと暮れた闇の中を、遠くに見える山の頂の町の光が目印となって照らす、そんな光景が目には浮かびます。

過酷な灼熱の荒れ野、そして闇。これは、決して楽園の環境ではありません。しかし、逆に言えば本当にしんどい、つらい、過酷な状況においてのみ、塩つぶとして析出されるのであるし、光になれるということではないかと私は考えます。

### 「障がい」という「地の塩」「世の光」

純も、障がいをもつことになり、自分の思うように体を動かしたり、歩き回ったりすることのできない逆境の人生であったからこそ、周囲からのたくさんの愛情とケアを注がれることになったのではないかと感じ

ているのです。だからこそ、ここまで生きてくる過程の中で蓄積された、かかわってくださったすべての方々の「大丈夫」と、純を思いやってくれる思いが本人の中に蓄積され、塩のように析出され、光のようにあふれ出てきたのではないかと思うのです。

たとえば、先ほど純は10歳になった時に、よろよろと歩き始めたと申しましたが、最初の一步は当時通っていた養護学校でした。その時に周りの先生方が、どれだけ喜んでくれたか。担任の男の先生が涙を流して喜んでくださったと聞きました。子どもの最初の一步は嬉しいものですが、家族を超えて、こんなにもたくさんの人々に喜ばれるなんて、本当に幸せだなあと思ったものです。そういったたくさんの皆さんの思いがこの子の中に蓄積されているのではないかと思うわけです。

今、生産性ということが言われます。障がいをもっている人たちは社会の役に立たないかのようなことを言われることもあります。しかし、純のダイジョブが私をなぐさめてくれます。また、今日も「地の塩」プロジェクトにかかわった学生が出席してくれていますが、止揚学園やそのほかのフィールド・ワーク先で、障がいのある方たちとの交流から多くのことを学んでいることがレポートからも窺えます。

そして本当に純が、うちの光であることが実際にあるんですね。純には多くの福祉関係の方々がかかわってくださっているのです。たとえば、下の子が保育園に入る時、純が療育でお世話になった先生が着任されたり、純の学校の関係者の方が、下の子のサッカーのコーチだったり、ということがあります。下の子たちにとっても、新しい環境に飛び込んでいく時の光になっているのです。

つまり、真っ暗な荒野、照り付ける太陽のもとの荒野、そういったさまざまな苦難の状況にある人々こそが、地の塩、世の光になるのではないかと思うわけです。更に言うならば、そういう苦境こそが、我々を地の塩、世の光として働かせてくれる、そういう状況なのではないかと思います。

そして、私たちが感じているもの、見ているもの、聞いているものは、ごくごく一部のんだ、それがすべてではないという思いをもって、言葉にはならないさまざまな声、その声に耳を傾けていかななくてはならない、そういう社会になってほしいと思う次第です。

もう一つ付け加えさせてください。学生の多くの方が純と同世代だと思います。ですので、私からすると、同じ時間を生きてきたまさに同志、仲間という意識があります。それは、皆さんのお父さん、お母さん方に対しても思う気持ちです。そして、純がここまで生きてくる過程の中で、何人かのお友達が、つまり皆さんと同じ世代のお友達が、天に召されています。障がいをもっていることは、疾患を抱えていることも多く、最初にイスラエルで入院した赤ちゃんの時に同じ病室だったお子さん、療育センターのお兄さん、養護学校の同級生が天に召されました。皆さんも決して今、生きていることは当たり前ではないのだ、神様のお考えのゆえであるということを感じて、大切に毎日を送っていただきたいと思う次第です。

2021年11月17日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録